



Data 2023-55

監督：成島出
原作：門井慶喜『銀河鉄道の父』
出演：役所広司／菅田将暉／森七菜
／豊田裕大／池谷のぶえ／
水澤紳吾／益岡徹／坂井真
紀／田中泯

👁️👁️ みどころ

「銀河鉄道の夜」は宮沢賢治作品だが、「銀河鉄道の父」って一体ナニ？それは、賢治の父親・政次郎のこと。そして「無名だった宮沢賢治を支えた、父と家族の絶対的な愛に涙する。日本中に届けたい感動の物語」が、門井慶喜の原作を映画化した本作だ。

役所広司が父親役、菅田将暉が賢治役と豪華だが、成島出監督作品の出来としては、『八日目の蟬』（11年）の方が数段上！だって、本作で私は宮沢賢治作品のどこがどのように素晴らしいのか、サッパリわからなかったから。

質屋の当主である父親と、後継ぎになるべき賢治。そんな父子間の確執と愛情は複雑で興味深いが、さて本作の説得力は如何に？

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■このタイトルは一体ナニ？原作は？■□■

私のような団塊世代は、宮沢賢治と聞けば、条件反射のように「雨ニモマケズ、風ニモマケズ」と結びつく。しかし、宮沢賢治と聞いて「銀河鉄道の夜」と結びつくのはどんな世代？さらに、「銀河鉄道の父」って一体ナニ？それは「銀河鉄道の夜」を生んだ詩人・宮沢賢治の父親、宮沢政次郎のことだ。そして、宮沢賢治の生涯を父親の視線から描いて第158回直木賞を受賞した門井慶喜の小説『銀河鉄道の父』を成島出監督が映画化したのが本作だ。政次郎役を演じるのは役所広司、そして、宮沢賢治役を演じるのは菅田将暉だ。

私は成島出監督作品では『八日目の蟬』（11年）（『シネマ26』195頁）が1番好き。同作は、井上真央演じるヒロインを軸に、産みの親 vs 育ての親の葛藤を、「邦画にもこんな名作あり！」と誇れる女たちの物語に高めていた。本作はそれと対照的に、父親と息子の物語。ややもすれば平板な「伝記モノ」になってしまいそうな宮沢賢治ネタを、父親の「我が息子はダメ息子だった」という視点から、前半はユーモアたっぷりに、後半はお涙

たっぶりに描いたが、さてその出来は？

■□■明治時代の質屋の店主があんな主婦役を？■□■

役所広司は聯合艦隊司令長官・山本五十六や長岡藩家老・河井継之助から悪徳刑事役まで何でもござれの演技派だから、明治時代を生きる質屋の店主という立場にありながら、チョー子煩惱な父親・政次郎役を演じさせてもうまいもの。宮沢家の後継者たる賢治が入院すると、その看病のために当主の仕事を放り出し、割烹着を着て病院のベッドに付き添う姿はそれなりに面白い。しかし、これって本当？明治時代、しかも岩手県花巻市で質屋の当主（サマ）をしている男が、あんな姿をするなんて現実にはありえないのでは・・・？

■□■長男はワガママ！しかして、賢治のワガママぶりは？■□■

他方、大した成績でもないのに「学問の道を進む！」と宣言したかと思えば、今度は「農業の道に！」さらに、人造宝石の商いにハマったかと思うと、日蓮宗に帰依してみたり、興味の対象がコロコロ変わり、定識、定見がないのが賢治。私も中学生の時は将棋指しになると宣言したり、勉強はほどほどに誤魔化しながら、映画や卓球等々好きなことにあれこれ手出しをしてきたから、賢治のことを悪くは言えないが、あの宗教狂いはかなり変！

賢治のこんな性格は、きっと質屋の長男として甘やかされて育ったためだ。本作を見ながらそんなことを確信できたのは、“ダメ長男”の賢治に対して、妹のトシ（森七菜）も、結果的に質屋の後を継いだ弟の清六（豊田裕大）もしっかり者だということがわかるため。そんなダメ長男の賢治は、トシが若くして結核で死んだのと同じように、結核によって37歳の若さで亡くなったが、なぜ彼は後世あんなに有名になったの？

■□■作家になるための努力は、いつどのように？■□■

私が学生運動に精を出していた1967年の秋、「作家を目指す」と公言していた同学年の文学部の女の子がいたが、彼女は「広辞苑に載っている単語を全部覚えるところからスタートする」と言っていた。しかし、そんなやり方って正しいの？

ここになぜそんなことを書くかという、それは、スクリーン上に見る若き日の宮沢賢治は、作家になるための努力や訓練を全くしていないためだ。彼が見せる作家らしい姿は、物語を書いてくれと子供の頃に言われていた妹のトシが結核になってしまった時、ひたすらその努力をした時だけだ。もちろん、ネタは自分の体験したことを元に空想を膨らませただけのもの。そんなやり方で物語を作るとはもちろん可能だが、彼のそれがなぜ人の心を打つものになったの？

■□■37歳での死亡後、なぜ出版物が次々と？■□■

昨今の出版業界の不況は、デジタル化、AI化の波に対応できなかったことが一因だが、20年以上にわたって『SHO-HEY シネマルーム』を52冊も出版し続けながら「赤字続き」の私にとっては、「本は売れない」、「儲かる本は100冊のうちの1冊のみ」というのが実感だ。

しかして、昭和8年（1933年）に37歳の若さで亡くなった時の賢治は全くの無名。“日本の国民的作家”と言われた司馬遼太郎が1991年に逝去した時の状況とは大違いだ。それなのに、なぜ彼が書き残していたさまざまな作品が賢治の死後、次々と出版され、今日のように有名な童話作家・宮沢賢治になったの？それは、すべて父親・政次郎のおかげだったらしい。本作は、そんな「無名だった宮沢賢治を支えた、父と家族の絶対的な愛に涙する。日本中に届けたい感動の物語」だが、さて、あなたの評価は？

2023（令和5）年5月9日記